

JAF AE Newsletter



No. 28 (May 2009)

二ホン英語とネイティブ英語

末延孝生 (兵庫県立大学名誉教授)

ネイティブの苦悩

中国の大学で英語を教えていたある日、同僚でアメリカ人の英語教授が、私の部屋を訪ねてきた。彼はテキサスからの、貴重なネイティブ・スピーカーだ。自分の英語が学生たちに伝わらず、学生たちから突きあげられているのだという。「それならどんな英語をしゃべればいいのか」と問うと、「末延教授のような、しっかり区切るしゃべり方をすればいい」といわれたそうだ。そこで、信じがたいことだが、この“ネイティブ”の先生が、私のところに発音の相談に来たというわけである。私も彼のテキサス方言の英語には、歯が立たなかったものだから、「単語一つ一つ、丁寧にゆっくりとしゃべればいい」と助言しておいた。ところが彼は、「早口は生まれつきだから、絶対に不可能だ」と主張した。

一年後大学に戻ってみると、彼はすでに学生たちの圧力で、追放されていた。中国の大学生たちは、自分たちが分からない英語は、自分の責任ではなく、しゃべる側の責任だと考える。

音の切れ目

ことばをしゃべるとき、“区切り”、語と語の間の「切れ目」が大切だ。適切なおとこで区切らなかつたら、ろれつの回らない、だらだらしたしゃべり方、よだれの垂れ流しになる。実際に、「あ—————」と、どこまでもそのまま止められない、ことばを区切れない、こんな病気が実在する。バスや電車の車掌のしゃべり方の多くは、切れ目がないため、だらしなく、肝心の駅の名前が分からない、そんな経験があるだろう。その点、甲子園の全国高校野球大会の宣誓は、メリハリがあって、はっきりと意味が分かるように、澆刺(はつらつ)としゃべる。区切りがはっきりしているからだ。

さて、アメリカ人が自然に英語をしゃべっているのを、「サウンド・スペクトログラフ」という音声分析機器で計測してみる。

Thi / si / sa / book.

シ シ ザ ブク

My / father an / d l,

マイ ファーザー アンダイ

一目でわかることは、私たち日本人が単語ごとに切るのと、まったく違った区切り方をしていることだ。This とはいわず、Thi で切り、残りのsと次のisのiをくっつけてsiのように、[子音+母音]の束をつなげて、リズムカクにしゃべる。一度試していただきたい。まるでアメリカ人になったような気分になる。

このような発話の区切り方は、腹式呼吸の英米人たちにとっては、音声学的にも経済的な、しゃべりやすい区切り方で、ごく自然な英語である。英米人同士では無意識に、瞬時に、単語どおりの形に聞きなおして、理解している。以下も同様な切り方である。

There are four / seasons in a / year,
/ spring, / summer, / fall and / winter.

デアラフォー スィーズンズィナ イア

スプリング サマ フォーラン ウィンタ

March, / April and / May are / spring / months.

マーチ エイプリラン メイアー スプリング

マンツ

Parks are / filled with / people en / joying
the / warm / season.

パークサー フィルドウズ ピープレン

ジョイングザ ワーム スィーズン

In June the / rainy / sea / son be / gins,
ンジュンザ レイニー シー ズンビ ギンズ

注意してしゃべると、強弱強弱と、おのおの一つの枠には、等間隔で一つのストレスが置かれているのが分かる。しかしこんな切り方をされたのでは、英米以外の人たちにはどうだろう。「フォーラン」「パークサ」「ピープレン」「ズンビ」などと、聞いたこともないような、音の束が聞こえてくる。

私たち日本人にとって、英米人の英語がわかりにくいという最大の理由は、彼らがこんな区切り方でしゃべっているからである。積み上げられた歴史の重みの上に、洗練に洗練を重ねてできあがった、他を寄せつけない、仲間同士特有の発音の特徴である。

これらを日本人大学生たちは、どのように聞いているだろうか。学生たちの書き取りを調べてゆくと、面白いことに気づく。

(the) United States

という英語国民の音声を聞いて、学習者の中には You and I stay とか、You are nice day、また、U.K.を You came などと書き取った学生がいた。

英語国民たちはまさに the Uni / ted S / tates のような発音、アクセントとともに、こうした区切り方をしているのである。また、Mask を “man ask” と書き取った学生がいたので、不思議に思って例の器械で調べてみると、mask の a と s の間にかすかな鼻音[n]の音を発していた。そんなかすかな音でさえ、日本の学生たちは、注意してしっかりと聞きとっていた。学習者たちは決して耳が悪くないどころか、むしろ音を話されたとおりに、敏感に忠実に聞き取りすぎることで、間違ってしまったのだ。

音という面だけに焦点をあてるなら、正直な学生たちが、聞こえたとおりに聞いて書きとることが間違いではなく、むしろしゃべる側に問題があることがわかる。日本の学生たちは、数百万円もする音声分析器に劣らない聴力を持っている。

このように、地味な実験と分析をやっていて、こうした[n]音のように、ピカリと光る“ダイヤモンド”が見つかることがある。エラー分析をしていて、ほんのちょっとしたエラーから、こうしたエラーの全体像が垣間見えることがある、という一例である。

それにしても、この“カッコいい”、そして世界中の人たちから分かりにくいと揶揄される英語こそが、皮肉なことに、日本の英語教育が目指している“ネイティブ英語”なのである。

物まね英語

最近、文科省の指導方針に合わせてカッコよく発音するために、「カタカナ英語」と称して、water のことを“ワラ”と発音するように、退廃的と思える英米式の英語発音を、“英語らしく”発音させる教授法がはやっている。

昔、神戸のタクシーの運転手たちが、外国の船員たちに呼びかけるのに Go on board a ship? (「乗船するの?」) を

「ゴボーのシッポ?」

と商売道具の“ひとつ覚え”で発していた、あのやり方だ。これは聞こえたとおりのまま真似る、ジョン・万次郎のころからの方法だが、当時はまだ英語の体系が定かでなかったから、手当たりしだいにそのまま使っていたとしてもしょうがない。

私が今まで「二ホン英語」とほぼ同じ意味で使っていた、本来の「カタカナ英語」という用語は、日本の五十音図に合わせて、単語の一つ一つの発音を、母音子音の順序で、自然に発音してゆく方法のことを指していたのだが、最近では上記のような、英米人が発音する崩れた発音そのものを、そっくり真似することがカタカナ英語だと誤解されてきた。

だがこれは、ただの英米英語の物まねで、例えていえば芭蕉の草書の、くにくにくと曲がった線を、ただわけもなくなぞるだけにすぎない。

日本の音声学者の中にも、カタカナ英語をまじめに提案する人たちが増えてきた。たとえば、Is this your room?

イズ ズイシュア ウルーム?

Sit down, please.

シランッ プリ (知らんっぷり)

What do you mean?

ウワー ドーユー ミー

(うわー どういう意味?)

You tell me.

ユーテ ミイ (言うてみい。)

Can you ski?

キョニユウスキ (巨乳好き?)

提案者によれば、日本人英語学習者の発音を、限りなく英米語に近い発音に真似させることが目的だという。駄洒落ならそれはそれで良いが、ネイティブの耳に、心地よく響くようにするために、ただただネイティブに似せるにはどうすればいいか、というお粗末な発想は、こっけいですらある。

その結果は、英米人どころか誰も理解できないし、読めもしない。ただカッコよくという、行き当たりばったりの発音だから、第一、そこには相応の言語体系がない。たとえばこの文をもとに your を his に変えるとき、どう発音すればいいのか。このように、文の生成や置き換えが困難で、普遍性・応用が効かないという点でも、危険というしかない。

単語をひとつずつ丁寧に切り離して発声すれば、世界中の人が理解できるものを、ただ何となく「英語らしく」かっこよく発音するだけのために、わざわざアメリカ流に、回り道をしてしゃべるから、英語国民たちはこちらを当然、上手な英語の使いだと誤解してしまい、後の会話が続かなくなる。私はこれを「物まね英語」と呼んでいる。

Singlish について

田嶋ティナ宏子 (白百合女子大学)

ご存知とは思いますが、シンガポール政府は長年にわたって、Singlish を「改善」しようと試み、Speak Good English Movement をしたり、それに伴って文法や語彙を「矯正」する小冊子を出版したりしているが、シンガポール政府観光局のホームページに、Singlish のページができた。"Here's a collection of 'Singlish' terms which you might find handy on your visit to Singapore." とある。政府の息がおもいきりかかっている政府観光局が、観光でシンガポールにやってくる、あるいはこれから行こうと思っている人たちのためにこのようなページを作ったというのは画期的だと思った。そこには、大変よく使われる Singlish の単語と例文が書かれている (http://www.visitsingapore.com/publish/stbportal/en/home/about_singapore/fun_stuff/singlish_dic

tionary.html)。

Russel Peters というインド系カナダ人のコメディアンがいる。彼は、インド英語やら中国人英語を使って、カナダやアメリカのコメディショーでかなり有名になっている。彼は二世だが、彼のコメディの内容からすると親は家の中でインド英語を話しているようである。You Tube で検索して観て欲しい。他にも、アメリカやカナダでは、日系、中国系、韓国系、インド系の二世や三世のコメディアンが自分の ethnicity を題材にしてコメディを披露して、かなりの人気を博している。それぞれに共通していることは、やはり一世代の英語。しかし、それが同じアジア系アメリカ人、カナダ人だけではなく、白人や他の人種にもうけているのである。

シンガポールでは、Dim Sum Dollies という3人の女性コメディアン兼歌手が年2回ほどミュージカルをやるのだが、これがシンガポール人には大うけで、チケットは即完売となる。あまりにも有名になってきて、最近では男性コメディアンたちといっしょに、シンガポール人うけするコメディやミュージカルを企画・上演している。観客の99.9%はシンガポール人なので、Singlish が分からないと同じように笑えないが、Singlish の「勉強」には最適である。その中でも、Food Court Aunties というミュージカルがある。Food Court とは、hawker centre (屋台) や、最近の屋内でエアコンが入った、いわゆるフード・コートを目指す。そこには、必ず食べたものを片付けるおばちゃんたちがいて、まだ少し皿に食べ物が残っていても、"Finish, ah?" と言って、こちらの答えも聞かずに皿を持っていこうとする。このミュージカルでは、ビジネスマンが食事をしているところに、3人の掃除のおばちゃんが現れ、"Finish?" を連発。最終的にはその男性が "Auntie, you don't mind if you just stand back a bit and wait?" と言う。(シンガポールでは、年上の女性のことを Auntie と呼ぶ。) そうすると、彼女は、"Aiyah, if I don't clean up, I get scolded scolded by my boss, and if I clean, I get scolded scolded by customer what!" (繰り返しは強調、語尾の子音は消えるので、その通りに書いた!) という。これも You Tube で観られると思う。是非チェックして欲しい。

新 刊 書 籍 紹 介



共生社会の異文化間 コミュニケーション

ベイツ・ホッフア

本名信行

竹下裕子 編著

三修社

ISBN: 978-4384042283

紹介者：田中富士美（東洋英和女学院大学）

「なんのために英語を教えているのだろう」と、日々の授業に追われながらも、ふと思うことはないだろうか。そんな時、本書は道標となり方向性を示してくれる。

21世紀のグローバリゼーションは、世界を単一化する流れではなく、多様な民族・文化・言語が共に生きる社会へと進むであろう。そして、私たち地球市民にとって「異文化間コミュニケーション能力」を高めることは最重要課題であり、英語教育もその視座の中に位置づけられる。

本書は、異文化間コミュニケーションの専門家による12本の論文により、4部構成で、具体的な事例を検討し、解決の道筋を探っている。

第1部では、異文化コミュニケーションの課題が展望される。言語教育において、文化（歴史や宗教、社会構造などを含む）を学ぶ必要性が論じられる。その背景には英語の多文化化がある。英語の異変種間で相互理解を図るためには「異文化間リテラシー」の育成が不可欠であることが強調される。第2部では、理論的側面が扱われる。日本的に言えば「内と外」という包含と排他的境界として使われてきた「アイデンティティ」や「文化」という概念も、グローバル時代においては単一・不変ではありえず、多文化間アイデンティティへと再創造していく必要があると指摘する。第3部は、中国・日本・米国の承諾獲得方法の差異、タイ人と日本人の相互イメージ調査、中国での面子交渉など、主にアジアのフィールド調査を中心に、現実の問題が検討される。第4部は、研究成果の応用として、ヨーロッパの言語政策や外国語教育における文化の問題に言及し、言語を広い意味の文化に位置づけることの大切さを論じている。

ている。

多文化共生社会を生きる私たちにとって、異文化間リテラシーの向上は必須科目であり、言語学の枠を越えて学際的に扱われるべき領域である。本書は、言語教育者はもとより、地球市民を育てたいと願うすべての教育者に手元に置いてほしい書籍である。



事典 世界のことば 141



梶茂樹

中島由美

林 徹 編

大修館書店

ISBN: 978-4-469-01279-8

紹介者：相川真佐夫（京都外国語短期大学）

本書は世界の141言語を取り上げ、それぞれの言語を「どんな言語か」「その言語の今」「その言語を話す人々」を3本柱に概説した事典である。世界には多種多様な言語が存在するが、言語そのものの形以上に、その言語を使う人々の生き様を文化人類学的に触れることができるのは本書のプロジェクトに関わったフィールド研究者ひとりひとりの思い入れのおかげであろう。

本書は編者の前書きによると、1993年に大修館書店から出された『世界のことば小事典』（柴田武編）をベースに書き改めたものということである。英語のバラエティも、インド英語、シンガポール英語、フィリピン英語、オーストラリア英語、アイルランド英語をカバーし、日本における言語についても日本語はもちろん、アイヌ語、沖縄語、宮古語をも概観できるのはなかなか楽しい。

D.クリスタルは世界の6,000言語のうち今世紀には半分の言語が消えてしまう運命にあると言う。まず様々な言語を取り巻く事実を知ることが言語の生命を途絶えさせないための第一歩なのかもしれない。そんな使命を感じさせてくれる一冊である。

ニュースレター編集担当より

JAF AE ニュースレター29号は10月中旬発行予定です。会員の皆様から記事を募集致します。国内外の紀行文、書籍紹介、海外おもしろ情報など「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに800~1,200字程度で奮って投稿下さい。画像なども是非ご投稿ください。

書いてみようというご意志がありましたら、9月中旬までに編集担当(相川)までお知らせください。アドレスは m_aikawa@kufs.ac.jp です。

アジア地域の学会情報

The Korea Association of Teachers of English (KATE), KATE 2009 International Conference

Theme: Across the Borders: Content-Based Instruction in the EFL Contexts

Date: 3-4 July, 2009

Venue: Ewha Womans University,
Seoul, South Korea

Website: <http://www.kate.or.kr>

Fourth International and 40th Annual ELTAI Conference

Theme: Managing Mixed-Ability Classes

Date: 7-9 August, 2009

Venue: J.B.A.S. College for Women,
Chennai India

Website: <http://www.eltai.org>

13th International INGED ELT Conference

Theme: Actions and Words

Date: 23-25 October, 2009

Venue: Gazi University, Ankara, Turkey

Website: <http://inged.org.tr>

18th International Symposium and Book Fair on English Teaching

Theme: Internet- and Corpus-based English Instruction

Date: 13-15 November, 2009

Venue: Chien Tan Overseas Youth Activity Center Taipei, Taiwan

Website: <http://www.eta.org.tw>

The Applied Linguistics Association of Korea (ALAK) 2009 Conference

Theme: Foreign Language Education Policy in Korean Context

Date: 5 December, 2009

Venue: Chung-Ang University,
Seoul, South Korea

Website: <http://www.alak.or.kr>

6th CamTESOL Conference on English Language Teaching

Theme: One World: World Englishes

Date: 27-28 February, 2010

Venue: the National Institute of Education
Phnom Penh, Cambodia

Website: <http://www.camtesol.org/>

【編集後記】

インフルエンザの影響で、京都では大多数の大学が約1週休講になり、イベントが中止になったり延期になったり、どこもかしこも苦渋の選択を強いられました。慎重になるのは悪いことではありませんが、準備を十分に重ねれば重ねるほど悔しい思いが大きいものです。今年度の全国大会は1回限り、無事に熊本で大会を迎えたいものです。

2009年5月30日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 相川真佐夫

事務局

〒226-0015

神奈川県横浜市緑区三保町 32

東洋英和女学院大学国際社会学部

竹下裕子研究室内

Fax: 045-922-6642 E-mail: jafae@live.jp

学会ホームページ: <http://www.jafae.org>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

Prof. Yuko Takeshita

Faculty of Social Sciences

Toyo Eiwa University

32 Miho-cho, Midori-ku, Yokohama-shi,
Kanagawa 226-0015 JAPAN

FAX: +81-45-922-6642

E-mail: jafae@live.jp

JAF AE's website: <http://www.jafae.org>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239